

○.

「あれ。今週はこっちに^{とまり}宿泊？ ^{さぎ}鷺」

「そうだよ、^{るう こ}蛭子。——さておきひとついいかな。製作の^{う み}親を呼び捨てるなよ」

^{ほのづか}仄塚鷺は、長旅の疲れを吐き出すように荷物を置いた。古びる気配のない椅子がそれをギシリ、と受け止める。

仄塚鷺はその実まったく疲れてはいないものの、この文明時代に現役を走る『電車』という文化にため息を巻いた。

「なあ蛭子。人間が^{こころ}心血注ぐ科学文明は素晴らしいなあ」

「どうしたの、いきなり？」

「人間の進化は、^{スピード}速度の進化と言えるだろうな。人間は性能を見極める天才だ。どれほどあがいても百メートルをせいぜい十秒切って走る程度、それが人間の限界だと最初に気づいた奴は聡明だ。人間は人間より速く走るものを探し出し、馬車を作り、駱駝に乗る技術を嗜んだ。それは人間の技術力と発想力の昇華であり、消化であり、結晶化だよなあ」

「お疲れのようね。じゃがりこあげる」

「その結果どうなったと思う？ 人間はすっかり^{あたま}頭脳で動くいきものになってしまった。人間はあまりにも自分達に都合のいい世の中を^{つくっ}創造してしまったがために、自分達が地に足のついたいきものだと忘れてしまったんだ……なにが言いたいかってな、^{スピード}速度の進化は、^{だいろ}機械品に頼る文明開化であって、人間の機能を凍結させる。ああ……私みたいに、じっとしてるのが苦手な奴には苦な出来栄だよこの文明^{せかい}」

どんだけ壮大な話になるのか胸を締めかせながら聞いていたのに、フタを開けば「電車でじっとしすぎて疲れた」と言っている。蛭子は適当に聞き流そうと思うものの、他にやることもないので話に耳を向けてみる。

……なんだ、そう考えると、この女の言うことは間違っちゃいない。機械に頼る文明開化？ そうでしょうね。機械がないこの部屋では、生きている人間だけが^い活きている。

「……なんか悪いな。疲れてるとつい長話をしたくなるんだ」

「自己分明瞭で結構ね、鷺。それでこそわたしの^{つくり}製造主」

「媚びるなよ、人形」

——机のうえに、鷺は懷から出した異物を放り投げた。

手帳と紙切れと、焦げた紙切れと、あと紙切れ。ひとつには『p8979323846 f5028841971 参照につき』と書かれている。参照も何もなんだこの暗号、と蛭子は物珍しげに眺めた。

「……これ、もしかして本のこと？」

鷺はなににも答えず、なににも応えなかった。

「p がページでf がラインなのは誰でも知ってるけど。なにこれ、ページモラインも十桁ある。そんな

本があるわけない」

「大したものじゃない、ただの洒落さ。———そうそう。そこに書いてあると思うが、土産話あるぞ。聞いておくか？」

「聞いておく」

「アコレア街に出^で没るシスター・アコレアなんだが、聞いたことは？」

「ある。“這い寄らずには祈^いられない”って奴ね。アレがどうかした？ あなたが殺すなら、わたし^こが潰すけど」

「いい返事だ。おまえに頼もうと思っていたから助かる。いや、おまえが引き受けると確信したからこそ、話を土産に選んだというのが正しいかな」

「ホントウに疲れているのね鷺は」

控えめな口調で蛭子は言った。

「おや、なぜ分かる？」

「あなた普段、そんなに本音をばんばん出さないでしょう」

よく分かってらっしゃる、と鷺は悪^{あく}態^とう。

「でも、シスター・アコレアの奴、あなたの琴線^{きんせん}に触るような馬鹿だった？」

「触るところか、蹴っ躓^ついて転がり落ちるほどだ。……なんかなあ、あいつ日本に来たぞ」

蛭子はうわあ、と顔を顰める。たったそれだけの短い罪状だが、彼女らふたりには分かる実状なのだろう。

「それで、どこまでやったの？ ……いや、やられたの？」

「聞いてくれよ。あいつ、私の事務所ひとつ焼き払い^{さいじょう}やがった。采条^{さいじょう}のケチなあれじゃあない、蘇芳坂^{すおうざか}のヤツ」

「確か、男の子の弟子^{ぼんにん}がいたところ？」

「そ。当の遠矢は無事だったから、ひっ捕まえて掃除頼んだ。あと不在時の対応任せて、私はアコレアの本国^{ほんきょ}に来たってわけ」

「それで、今に至るってコトね」

「そう」

いつの間にか蛭子がコーヒーの準備を整えていた。来客には慣れているのか。来客などあるはずもないのだが。

「鷺、これ飲む？」

「飲む」

「今から淹れるから五分待つて」

「了解した。……今度からは、準備できてから聞いてくれ」

あるA国、アコレア街、辺境の森近くのそのまた辺境。辺鄙で偏屈な一片に、灰塚蛭子の住まいは在った。

師いわく「絶好の隠れ家」で、市いわく「郵便が面倒」で、士いわく「人間じゃない」だそう。
郵便屋が音を上げるほどの僻地は、それはそれは運命的な隠れ家に相應しい。

ただし、文明の利を捨てる覚悟がある者だけが選ぶ場所。加えて、他人などいっさい要らないと
割り切る者だけが選ぶ墓所。灰塚蠟子は当然のようにそれを切って捨て、運命を選んだのだ。士
の言う「人間じゃない」は、人間の住める場所^{も の}ではない此処を指したのか、人間の宿る固体^{も の}ではな
い彼女を指したのか。

「なんとか生きていけてるみたいじゃないか、蠟子」

「わたしは、人が言う『これが無いと生きていけない』を信じてないの。人なんて水と栄養と空気
があれば生きていけるのに、どうして無人島に持っていく荷物に『友達』とか『親』とか『ゲー
ム』とか言い出すのか理解できない」

「蠟子が言ってるのは、人というかヒトだな。おまえは造られたものであるがゆえに、人間とは違う
んだよ。なんせおまえが自分^{みずから}を人間だと思っていない以上は人間を理解できないし、人という生物と
ヒト科という種目を分別するのは難しいさ。

人間を知りたければ、人間になるのが近道^{いちばん}だ。私はそう思う」

鷺は品定めするような瞳で蠟子を見ると、その緊張感を気だるそうに解き、コーヒーの完成を待つ。

蠟子は思う——。別に、彼女は人間の心持ちなどに興味はなかった。鷺も知るに及ばない事
実だが、蠟子はむしろ人間^{とくべつ}を神聖視している。人間ではなく人形である彼女は、誰よりも自分^{みずから}と
人間との間にある段差^{か み}を識^{かのじょ}っている。そんな蠟子がどうして人間を、図鑑のように見下ろせようか。

しかし同時に、そんな自分から何の感情も浮かばないことにも疑問はなかった。人間は彼女に
とって特別で、事実として自分は人間ではない。けれど、それに不満はないし、それは不安ではな
い。人間だって、自分達と神がさっぱり違うなんてのは当然知っているはずだ。それはきっと、自分
達と昆虫がどれだけ違うかを知っているのと、何ら変わりはないことなのだ。そしてそれは、蠟子と人
間がどれだけ違うのかを知っているのと、やはり変わりはないのである。

結局のところ、蠟子は人間と自分が異なるいきものであるという認識を捨てられないのだ。ゆえに、
蠟子は思う。人間は神秘的だし、謎で出来ていて不思議だし、何より化け物だ。でもだからといっ
て憧れもしないし惚れもしない。欲望のままに知識を貪る、学者のように成り果てもしない。——信
仰に生きる奴の気分なんて、神よりもどうだっていいんだから。

「ところでさ、蠟子」

退屈しのぎに摘む菓子でも持ってこようかと思っていた矢先、製造^{う み}の親に止められる。

「シスター・アコレアは長髪だって、知ってるか？」

「……知らないけど、なんとなく分かる。あなたのお土産を見た後だから」

「ほう。やっぱり、私の娘^{すんど}ながら聡明いな」

舐めすぎだ。

蠟子は紙切れ^{やぶ き}を破棄ながら、黙って円周率の本を投げた。

1.

狂^{くる}るもの拒まず、逝^さ去るもの背負わず。

———たまにいます。信^{こひつじ}心もなく、布施もなく、見返りだけを求める蒸。我らが神を造物主を、無尽蔵の財源を持つ大富豪と勘違いしてはおられませんか。彼はホントウは意地悪で貧乏で、勝手に酒と小麦粉の食べものを押し付けては去ってゆきます。

二兎を追うもの、一兎を燃えず。

———たまにいます。労働もせず、瞑想もせず、見返りだけを求める蒸。我らが教会を石畳を、無条件の収入を得る葡萄畑と勘違いしてはおられませんか。愚か者は火を放ち、金品だけを脅し取っては攫ってゆきます。

それならばシスター・アコレアはここに、炎によるただの蹂躪^{おこ}を熾^{さか}すことを誓います。

狂^{くる}るものをひたすら火葬に伏し、逝^さ去るものの想いなど背負わずに活きます。

屋根は燃え上がろうと構いません。私だけが燃えず、愚者の思惑を火葬します。

ああ、人間よ。神を信じる唯一の生物よ。おまえ達は聡明で、おまえ達は曖昧で、おまえ達は蒙昧です。

そんなおまえ達が、私は大^{きらい}好き。

「見つけた。早速^{つづ}だけど、あなたを消すわね」

2.

「……………^{すご}凄いわ。シスター・アコレア」

感嘆は蠟子のものだった。

アコレア街にある教会は、いま大きく炎上している。悪夢に似た光景の中、その熱い鳥籠に彼女達は立っていた。一日に何人もの来客を安らげてきた木椅子は、醜く黒い、崩れそうなオブジェに様変わり。鮮やかで派手なガラス細工は、火事の煌めきを芸術のそれに仕上げる。

虹色^{かさい}の喝采に見舞われながら、蠟子^{にんぎょう}は服が汚れることも厭わずに歩む。

「ああ、そうか———この期に及んで、まだわたしは人間と違うのね」

蠟子は傷を知らず、疵を知っている。寂しく呟いた彼女の目は自身の腕を映した。そこには割れて煤けたパーツがあるだけで、そこには人間の腕などなかった。

人間は怪我をすると、時に取り返しのつかない場合がある。人形は直す者がいる限り、永遠に生き続けることができる。蠟子はなんとなく理解した。人間と人形のいちばん異なる部分は、この『命』というパーツだと。

「シスター・アコレア。十六年前に焼かれて死んだ、教会で働く娘。放火だったんだってね？ あ

あ、古傷を抉るようならごめんなさい。わたし、あなたを抉るのが仕事だから」

蠟子の眼前には、焦げ痕ひとつない修道服を着たシスターがいる。恐ろしく長い髪の毛を引きずり、悍ましく怖い瞳を湛え、憎悪の亡霊となって燃えている。それは何も口にしない。おそらくは呼吸すら無いだろう。

「燃えて苦しんで、悶えて狂死んだあなたは、火の幽霊になって教会にとり憑いた。それに飽き足らず、自分を祓おうと試みる霊媒師——ならぬ霊祓い師を全滅させようとまで考えた。まあその中にはわたしの親もいたんだけど……。よほどの怒りだったんだろうね。なんせ、黒焦げる以前、あなたは普通の女の子だったんだから」

他人事みたいに、他人事を口にする蠟子。

「——ア、ア——」

苦しげに息を放つ眼前の亡霊。まるで生きていないみたいに悶える。その唇が上下して、苦勞の末に、炎の中に言葉を落とした。

「……………アナ、タ。まるで、怒ったことがないみたいじゃない？」

木枯らしよりも弱々しい、しかし地鳴らしよりも猛々しい神託。ここに来て、ようやく蠟子は形成を悟る。苦しむこともなく傷もない人形。苦しんで疵だらけの亡霊。この状況において、圧倒的に不利なのは人形であった。

「アナタは私を知らない」

「ええ。わたしはあなたを知らないわ」

——火災が動いた。土石流ではなく火砕流とでも言うべきか。教会を喰らう炎は、教会を齧る焰の尾となり、砕いた壁ごと蠟子に雪崩れかかる。

そんなものは、所詮は勢いだけの技である。蠟子は恐れを知らない目で火砕流を見切る。回避の動作は最短に、着地の所作は大胆に。それだけで芸術点でも出そうな避け技だが、蠟子はさらにここで仕留めに掛かった。が・ちゃ・ん。手首が駆動する。

茎が折れるように手首が折れ曲がり、その断面からは骨が覗く——いや、その白い骨らしきモノの正体は、その実そんな人間的な部分ではなかった。人形にのみ許された改造。名前どおりの仕込み白刃である。

「——何度でも宣教してあげる。アナタは、亡霊を知らない」

幽霊からの宣託。その言葉はまことに真実で、蠟子は亡霊の正体・資質・実質に関係なく力任せな攻撃を仕掛けていた。一瞬で距離を帳消した、蠟子の一步は凄まじい。されど届いたのは足だけで、自慢の仕込み白刃は届くどころか空振った。

「……太古からの謎よね。確かに、わたしは亡霊を知らないみたい」

手ごたえ無き手ごたえに、蠟子は悔しさを通り越えて感心する。傍ら——自ら接近してきた、哀れな犠牲者を亡霊は憐憫む。

シスター・アコレアの長い髪が浮き上がると、火の手がいつそう強くなった。……よくある慣用句

だが、今だけは比喩のない現実だ。火は手のように形を変え、蠟子を絡めとろうとする。

しかし蠟子は難なく退がる。指は虚空を絡めとる。……これも一種の才能か、と亡霊は思った。
「なんて謎なの」

蠟子は瞳に亡霊を捉え、声に倣う。

「なんで人間の利器は亡霊に勝てないのかしら。ホントウに、どうしてなの？　ねえ、亡霊さん。いやシスター・アコレア。考えたことはない？　考えてみれば分からない。どうしてか、白刃はあなたに届かない」

「……………」

亡霊には、人形がなにを言い出すのか理解できなかった。人の身で幽霊に直接触れられないなど、当然の答えだ。常識である。わざわざ問い質すのは愚の骨頂であるともいえよう。ああ、けれど、ならばなぜ亡霊は今、^{わたし}反論を為さずにいるのか——

「……無言になるなよ、^{はんげき}蒸」

蠟子が挑発する。

途端——熱が上がった。

空気が^と熔けそうなほどの地獄。

熱気はすでに灼熱と化しており、人間が立っていられるものではない。この時点で既に、亡霊の力は蠟子の想像の外にあった。

……思わず無言になってしまった。返す言葉が出てこなかった。それが亡霊にとって屈辱だったのだ。たかが人形の言うこと、いちいち気にかけまいとしていたが、それでもシスター・アコレアは屈辱を浴びた。それが許せない。

そして蹂躪が始まる。哀れな人形がどれほどの駆動力を持っているのか知らないが、一步でも動こうものならそれは灼熱へのダイブを意味する。この蒸し釜のような場所で、人形はただ孤立していた。

やがて四肢のどれかが燃えた。人形ながらに痛みに似たものが伝わっているのか、蠟子の表情は苦悶に曇る。体のどれかが欠損するだけで、全体的な稼動率は五割ほど損なうらしい。待つてましたとばかりに、稼動しなくなった人形を炎は燃やし倒す。

火炎は叩きつける憎悪のよう。苛烈さを増すこの地獄に、逃げ場はなかった。絡めとるような炎はいまや薙ぎ倒すような炎になっている。まるで^{もや}飴を嘗めるかのごとくぐっしゃぐしゃに掻き回し、殺して、殺す。

怒りを心に湛えたまま、亡霊は炎を一度退げる。……床に落ちている塊は人形だ。蠟子は無残を極めた姿でそこに残った。

なるほど、と蠟子と思う。なぜ今、シスター・アコレアはトドメに至らなかったのか。それは、被害者の^{わたし}懇願がないからだ。焦熱の拷問で炙り抜き、耐えかねた者は彼女に許しを乞うだろう。もう^や止めてください、もう^{あや}殺めてください、と。

生にしても死にしても、この苦痛から逃れるためならば、彼女のもとへ這い寄らずにはいられない。

彼女にしてもそうだ。獲物が惨めに無様に這い寄って、許しを乞わない限りは許さない。亡霊が息の根を止めるのは、亡霊に泣き継^{いの}った者だけだ。その者だけが、亡霊に死後^{かのじよ}を祈られる。継らずには殺されない。這い寄らずには、祈られないのである。

蠟子は無駄に納得した。

ああ——これはホントウに、這い寄らずには祈られない——。

3.

ばけもの
亡霊め。

人形の声がそう響いた。それが空気の波となって、炎を揺らしたかと思われた次の瞬間にはもう、蠟子はシスター・アコレアの前に着地する。

その容姿に、亡霊は怒涛の驚愕をする。

四肢、いや指一本、毛髪、細胞に至るまで、どこにも焼けた痕跡がない。その人形は今しがた、火炎地獄を辛くも脱出した身でありながら、あまりにもその惨状に相応しくない姿だった。

「……ナゼ！」

「わたしは人形だから。燃えはするけれど、焼け爛れはしないのよ」

確かに、人形のボディやパーツは完全といっていいほどの無傷。その人形の耐火性を証明するかのように、蠟子の衣服だけはしっかりと襤褸布化していた。

しかし馬鹿を言え、と亡霊は喘ぐ。仮に今、なにひとつ焼け痕のない人形の存在を許せたとしても、その一歩前——無残を極めた姿で炎に嘗められていた、あの人形の姿はなんだったのか？

「……なんて、冗談よ。耐火用の護石^{アンチファイア}っていかお守りみたいなのを、鷲に持たされただけなの。これでわたしは焼けることがない。さっきも言ったとおり、燃えはするんだけど。

それと、火が原因で壊れた物を復元する作用もあるわね。加えて火傷の封印と、熱の破壊も。——いくら亡霊の相手を人形にさせるからって、これは過保護すぎないかしらあの製造主」

……最初に臨戦態勢に移った時はまだ護石を身につけておらず、一度は炎にその身を焼かれたものの、護石を使うことで再生したということか。なんだそれは……。そんな無意味なアンフェアがあっていいものか。わざわざ人形は犠牲になりきたとでも？ まるでこの人形は、この亡霊を観察^{わたし}でモしているかのようではないか。あたかも、図鑑を触るように。

しかしなんということだ、と亡霊は不満を吐く。炎では人形に対処できない。人形は亡霊に触れることができない。先ほども言ったがそれは常識で、このままでは千日手になる。お互い^{あいて}が^こお互いを^{ころ}対処せないという状況になる。なぜこんなことに？ 人間どころか、人形を相手に。

「アナタ……この、人形^{ばけもの}め……！」

「——似たようなことをわたしも言ったわね。ねえ、さっきの質問だけど。あなたはホントウに考え

なかったの？ 亡霊はどうして、人間の文明に対して無敵なのか」

「カンタンよ。亡霊はね、この世のものじゃないからよ！」

シスター・アコレアはどこか誇らしげに謳う。

「その通りだと思うわ。亡霊はこの世のものじゃないからよ。亡霊はこの世に亡いくせに、この世を一方的に乱すことはできるもんだから、『この世』から嫌われてるの。いうなれば、だからこの文明は亡霊を触ってなんてあげないの。」

わたしの製造主の言葉だと、無害なものを浮遊霊、有害なものを不幽霊と呼ぶらしいけど、あなたみたいな厄介亡霊は確実に不幽霊でしょう。『幽かでない霊』っていう意味らしいけど、よかったわね。これがホントウの、愛称バッチリってやつ……なんちゃって」

蠟子は完全に再生した足で歩く。

互いが千日手に落ち入るといふ致命的な欠陥を、たったいま見出したにもかかわらず、蠟子の歩みは勇ましい。それは確実に、この燃え盛る亡霊を存在ごと叩き潰すという、自信に溢れた自身である。

—— 蠟子が生まれて初めて理解した感覚は喜びである。すでに過去の話だが、灰塚鷲に連れられた先の国で、蠟子は思いがけぬ歓喜に出会う。外見はとてつもなく人間なのに、内容は途方もなく抜け落ちて、全容はただの木偶ドール。そんな彼女はまず、歓喜を覚えることで人間へと近づいた。

「といっても、わたしはもう痛いも、暑いも、熱いも、篤いも知っている —— まえに一度死にかけた経験があるから、そのあたりは周到なの。」

だから —— よかったわね亡霊。あなたの想いは、わたしがこれから理解てあげる」

何かが発動した。

総毛立つ嫌な殺気が、亡霊に死期を……いや、正真正銘の消滅を悟らせる。好機はもうないとシスター・アコレアは理解する。勝機は摘まれ、正気は踏まれたのだと。しかし、亡霊は諦めはしたものの、投げ出しはしなかったらしい。

—— シスター・アコレアの自慢の長髪が尖る。

死せる亡霊と成り果てる以前、彼女は長い髪が似合う、美しい修道女だった。聡く賢く、どこまでも優しい彼女。そんな修道女は、ホントウに恵まれないもの達 —— 産まれながらに幸福を知らず、煌びやかなものは全部憎むべき敵なのだと思って生きていたもの達から見れば、眩しくて脆弱な肉であった。

やがて修道女は残虐に殺される。慎ましやかな住家に火を放たれた。可憐で細い四肢に、焼けた鉄を押し当てられた。誓いの鐘よりも濁く響く悲鳴。ぐずぐずの火傷は、重すぎる呪縛となって彼女に降りかかった。彼女は悪いことはなにもしていなかった。彼女は咎められるいわれなどなかった。

不幸なことに、それは、恵まれぬもの達も同じだった。彼らもまた、たまたま不幸な身の上に堕ちてきただけで、それを悪などと虐げられるいわれはないのだから。……手足を動かせず、蚯蚓のように這いずる修道女。彼女を襲った彼らは、その修道女の名前も知らなかったし、興味もなかった。ただ、襲わずにはいられない性であり、襲わなくてはならない運命なのだ。抵抗どころかろくに身動きもできない修道女の、嫌味のように綺麗な長い髪を掴むと、彼らはそれに——火を放った。

瞬く間に、面白いほどに、火は導火線みたいに燃え移った。鉄の焼けるような独特の悪臭に包まれながら、修道女は頭の焼ける痛みのにたうった。こうして彼女は燃え尽きた。かるうじて首から下が燃え残るも、そこから上は全部真っ黒。燃えて終わったマッチみたいに成り果てて、彼女は亡霊になった。

だから、彼女の憎悪の先端はその髪の毛なのだ。

「ようやく、力を現したわね」

蠟子はその物質を難なく砕ききる。しかも、空振ったばかりの白刃で以って。もう亡霊にはカラクリが掴めない美技だ。炎の勢いを司っていた髪の毛が折れると、みるみる火災の勢いは落ちる。その無力さにまた、亡霊は歯を食いしばる。この炎を燃やすのは怒りである。

「とても辛そうよ」

なにが辛そうよだ。辛いのは当然じゃないか。亡霊は怒る。

どこにもどこにでも怒りはあった。

神を信じるものを私は救いません。神を疑うものを私は救いたい。神がいると、天にましますとおし宣教えられ、それをどうして儘、呑み込む？ ああ、人間よ。神を信じる唯一の生物よ。おまえ達は聡明で、おまえ達は曖昧で、おまえ達は蒙昧です。

おまえ達は考えなしです。自分の知る世界の及ばぬ、先の存在をさりと見せられて、どうして疑わずにいられましょう。なのにおまえ達は、疑わずにいるのですね。考えが足りない。本質を見ようとしない。考える。考えなければならぬ。考えるべきだ。考えよう。考えてください。考えなさい。考えなければだめ。この、馬鹿！

「……もう少し、誰かが考えていたなら、」

人形の声がした。……ホントウに、もう少し誰かが考えてくれたなら。

「「あなたは亡霊なんかじゃなかったかも、知れないわね」」

怒り。憎しみ。何の罪もない自分を殺す、あの狂人どもが憎い。何の罪もない誰かを殺さなければならぬ、不幸者を作った誰かが憎い。

考えなしに生み出された、あの悲劇が憎い。あの悲劇を生み出した、誰かの考えなしが憎い——。

「……………ねえ、亡霊さん。あなたは憎悪なんかじゃない。

わたしは人形だけど、あなたを理解したいから、分かる。あなたは——」

4.

おお、上出来だ。……灰塚鷺は帰宅した同胞を見るや、こんな言葉と朝食の準備でもって出迎えた。

用意されたメニューは、蠟子の保管してあった食料を無断で用いたものだったのが問題だ。

「……勝手に消費したことは謝るが、普段食えない料理を振舞ってもらえるだけ感謝は思わんのか」

「わたしは人形だし、食事なんて重視しないのが普通でしょ」

もつともである。

「しかし、なんだ。ちょっと奥で着替えてこい蠟子。おまえよくそんな格好でここまで帰ってこられたな」

「いや、これは服が焼け落ちてるから痛々しく見えるだけであって、駆動するぶんには支障はないんだけど」

「服が焼け落ちてるから問題なんだ!」

半裸というか九割裸の蠟子をひつつかんで、箆笥部屋に放り投げる灰塚鷺。……普段の彼女を知る人間からすれば、ちょっと意外な一面を見れたと思うに違いない。灰塚鷺は意外にも、他人を気遣える常識人だった。

「……さて。着替えながらでいい、話を聞かせてもらおう」

そんな灰塚鷺が仕事へシフトする。

「亡霊、通称『シスター・アコレア』。あれの正体は分かったか？」

「……正体は分からなかった。ただ、性根は掴めた気がする」

「ほう？」

「あの人は……憤怒の霊なんかじゃなく。誰かの無思考、無思慮を悲しむ悲哀の亡霊だったんじゃないかな……って、わたしは思う」

ぽかん、と灰塚鷺はあっけにと取られ、しばらくして息を噴き出す。

「ふふっ。おい蠟子、一応聞くけど、おまえに悲哀なんて分かるのか」

「分からない。ただ、彼女の中にはふたつの感情があって、それらに名前をつけて区分するのなら、わたしは『憎悪』と『悲哀』だと思った。

あのシスターは昔、理不尽な不幸で殺された。それに対する憎悪の塊なんだとわたしも考えてた。けれど、教会を焼いたあの炎を感じて、その考えは少し変わったの。理不尽に不幸を生み出す人間、考えなしに悲劇を作り出す人間、そんな人間の愚かさを彼女は悲しんでる。そんな側面もあったように思うわ」

名前を付けて区分するのなら、と蠟子は言った。

触れて実感することのできない人形は、触れて直感することで亡霊シスターの感情を推察しようとしたのか。そうするとやはり彼女るろこは、人形として人間を高く評価し、固く表グラフ化しているということになる。……それではまだまだだな、と鶯は思った。

「ふうん……まあ、当事者の意見だ。尊重させてもらおう。他には？」

「他には、って……鶯あなた、今のわたしの話をそこで聞いてて、何も思わなかったの？」

「思うところがないわけじゃないさ。ただ、おまえは私の話を聞きたいのか？」

蠟子は声を出さずにうなずく。鶯はそれを雰囲気を感じ取った。

「……あのシスターが死んだのは十六年前。その時期のこの国は、悪政のどん底にいた。すでに指導者が変わって持ち直したみたいだから、今はその心配はいらんがね。ただ、心配はないが名残はある。気が向いたら観光にでも行くといい。

後に『シスター・アコレア』となる元修道女、その彼女を殺した連中を生み出したのも、その悪政による国力低下が主な原因だろうな。殺さなければ食べていけない、なんていう生活環境で、教会というのは確かに眩しい。莫大とまでは言わずも、多少なりとも寄付があるからな、そういう団体ってのは」

……加えて、怪しい取引かげが裏で行われていた事実も裏付けられているらしい。そこにあのシスターが加担している、などとは思いたくないが、ひょっとしたらあの悲劇は、それに触発された惨劇だったのかもしれない。どちらにせよ彼女には救いがなさすぎた。

「しかし蠟子、おまえちょっとおかしいぞ。まず名前を知り、次に中身を知るのが学習というものだ。けれどおまえの体験は逆だ。まず憎悪に触れ、それを憎悪だと思うなんておまえ、それは矛盾って奴だぞ」

「矛盾じゃないわ。言うならば正順よ。彼女はとてつもなく大きな感情に突き動かされていて、彼女はそれを憎悪だと言った。だからそれは憎悪なんだろうとわたしも考えた。けれど、それを憎悪だと語る彼女は、とても悲しげだとわたしは感じたの」

「はははははは！ おい人形、人間の真似事しかできないおまえが、人間の片鱗である亡霊を理解できたつもりかよ」

「真似事しかできない人形わたしにだって、分かることはあるんだから。だいいち、あんな風．．．．．に泣きながら言われちゃ、それは憎悪だけじゃないんだって誰でも分かるでしょう」

「ふうん——推察から観察に移ったのか。確かに、それはもっともだ。人間の感情を、感覚を、本や言伝で見聞きした内容から照らし合わせたんだな」

「当然よ。だって、分からないものを分かっていると誇るほど、おかしいことはないのに」

これは驚いた、と鶯は嘆息する。無知を既知といばることの恥、虚栄をこの人形は知っているのか。果たしてそれは実感か、それとも見聞か。もしくは、これまで触れてきた感情も のの答えから、自分なりに出した想像こたえなのか。

「蠟子、おまえ中々——成長かんせいしているみたいじゃないか。嬉しいぞ」

「ふふっ。まあ嬉しさなら、こんなわたしにも分かるよ。

じゃあ、今度はわたしから聞かせてもらおうわね。いい？」

もちろんだとも、と鷺は頷く。

アンチファイア ご いし アンチスピリット

「耐火用の護石、対幽体の護符、抗燃焼剤、そして幽霊に触れる魔力。どれもこれもあなたがわたしに与えたものよ」

「ああ。使い心地はどうだった？」

「最高。同時に最悪だった。どれもね、一度はもしかしたら不要なんじゃないかって思って、使わずに試してみた。石を使わずに焼かれてみたし、護符を使わずに幽霊に攻撃したし、抗燃焼を摂らずに炎に管められたわ。そしたらどれも、わたしの身を守るには必要だって分かった——同時に、理不尽なまでにあの亡霊を封じ込めるものだと気づいた」

亡霊と人形のあいだにある格差を埋め、亡霊の特技を無意味なものに成り下がらせ、しまいには一方的な攻撃を可能にする戦術道具。

「わたしが言うのもなんだけど——鷺、あなたシスター・アコレアに恨みでもあるの？ あってもここまで徹底的にしなきゃいけないの？ 彼女を一方的に粉碎して、彼女を分かってあげられる余地もない、それでよかったわけ？」

「恨み？ あるさ。言っただろ、私は事務所を燃^ややされたし、加えて亡霊の調査は私の仕事の一環だぞ。報復ついでにぶっ潰^こすくらい、起きて歯を磨くのと同じく当然だ」

「——」

蠟子は言いたいことを心の中にしたためているのだろう。無言だが、その目は鷺に口出ししたくてたまらない目だ。鷺もそれを感じたが、先回りして反論しようなんて気にはならなかった。

鷺にとっては、敵の弱点をつくことに特化した武装は、対峙するに際して当たり前のことだ。しかし蠟子には、足を怪我したスポーツマンの足をひたすら棒で殴るのと同じに見えたのだろう。相手の弱いところばかり突くのは、卑怯者のすることだと思ったのだ。

鷺も、そんな蠟子の感想を理解していた。

「……言いたいことは分かる。蠟子、おまえは人形とかいうより何よりまず、優しいからな」

「優しさなんて知らないわ。優しい人間を真似^{むすめ}たことはあるけど」

「仮にそうでもいいさ。だから、そんな優しい人形を守るためなら——人間は、卑怯者になったっていいんじゃないかな」

「……………そうね、わたしが無事に帰らないと、そもそも仕事にならなかったんだし」

「おまえはまたそう言う。私にとっては、おまえのその無事な姿がなにより卑怯なんだがね」

鷺は自然とこみ上げた笑いを隠さない。

手持ち無沙汰に、昨日蠟子が作り残したコーヒーを注いで、口をつける。

「冷たっ」

「当たり前じゃない。少しは考えてよ」

5.

溶け落ちた教会は黒い墓標。

つい八時間ほど前まで、ここは灼熱の鳥籠で、地獄の片割れだった。その渦中で、ある人形と亡霊のあいだに何があったのか、正確に知るものは少ない。

それに、おそらくは考えようとしないだろう。

帰国する途中の旅路で、オカルトライターは立ち止まった。

「悲劇のかけらも、時間が過ぎれば記憶を過ぎていく。思い出されることはあっても、重く出されることは^{われわれ}ないのが現実だ。人間はそれを知っているから、時に目の前の現実を考えない」

その女に、人形が問うた。

「……またどこかで、同じような^{こ と}悲劇は生まれるのかな」

「人間の進化は^{スピード}速度の進化だ。少なくとも今度はもっと^{は や}迅速く、考えなしの悪政は淘汰されるだろう」

人間が今度こそ、少しでも考えることができるように。

「わたしもそう、^{おも}祈りたい」

End.